

英国病理学会派遣報告書

名古屋市立大学大学院医学研究科 実験病態病理学 内木 綾

国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科 里見介史

このたび日英病理学会国際交流事業の一環として、オランダ、マーストリヒトにて開催された英国病理学会（Maastricht Pathology 2018, 2018年6月19-22日, 学会長: Heike Grabsch 教授）に参加させていただきました。マーストリヒトはオランダ最古の都市といわれ、オランダ南部のドイツとベルギーの間に張り出す地域に位置しています。その特徴的な地理的位置関係と古くから文化交流の要衝であったことから「ヨーロッパのバルコニー」とも称され、EUのマーストリヒト条約締結の舞台として知られます。世界一美しい本屋と言われるブックハンデル・ドミニカンの所在地としても知名度が高い街です。

学術集会は市の中心部から徒歩で30分ほど、マーストリヒト大学医学部のすぐ近くにある Maastricht Exhibition and Congress Centre で行われました。集会では病理学会国際交流委員長である石川雄一先生のご尽力と学会長の Heike Grabsch 教授のご厚意により、細胞間相互連絡による NASH 肝障害調節機構の解析と NASH モデルの確立（内木会員）とグリオーマの診断における新規 FISH プローブの開発（里見会員）をそれぞれシンポジウムにおいて発表する機会をお与えいただきました。英国病理学会は日本病理学会総会に比べると規模が小さく、セッションで扱われる臓器もある程度限定され、外科病理診断学に関する発表や教育講演が多くを占めていました。また、米国など外国からも複数の演者が招待され、Molecular Pathological Epidemiology など新しい分野の取り込みもみられました。最終日には TEFAP Oncology Summit と題して、演者と聴衆が同じステージ上で、がんの疫学、予防、生物学、治療など多方面の話題について討論するユニークなセッションもありました。学会会場はコンパクトにまとめられており、休憩時間にはコーヒーとお菓子を片手に活発な意見交換、交流がなされていました。また、trainee が主体となって企画・進行するワークショップやセッションが連日プログラムに組み込まれており、スペインやポルトガル、イタリアなどからも若手病理医や医学生が積極的に参加、交流している様子が印象的でした。

学会場外では、マース川沿いにあり、優れた中世の宗教画・彫刻や現代アートをコレクションした、ボネファンテンという名の美しい美術館において、ネットワークレセプションという交流会がありました。会員同士が美術館のロビースペースでフィンガーデ IPP やワインを片手に自由に交流した後は、学芸員に案内され館内のコレクションを閲覧するイベントが準備されており、参加者達を楽しませていました。またベルギーの Grotten van Kanne という洞窟で開催された、カンファレンスディナーのスケールには驚かされました。小さな洞窟の入り口から、トロッコに揺られたどり着いた先には、巨大で荘厳な空間が開け、そこにテーブルセットやステージなどを備えた会場が設けられていました。隣国へ簡単に移動できる点や、アイデアのユニークさからは、ヨーロッパならではの雰囲気が感じられました。



Trainees' and Undergraduates' Networking Boat Trip にて。マース川をベルギー国境まで遊覧しながら参加者と親睦を深めた。写真左端が内木会員。

学会期間中には、マーストリヒト大学医学部付属病院に相当する **Maastricht University Medical Center (Maastricht UMC+)** の病理部門を見学させていただきました。オランダには、アムステルダム大学、アムステルダム自由大学、ライデン大学、ロッテルダム大学、フロニンゲン大学、ネイメーヘン大学、ユトレヒト大学、そしてマーストリヒト大学の 8 大学に医学部があり、マーストリヒト大学医学部は国内の医師不足に対応するため 1976 年に設立された最も新しい医学部です。開設当初より初学年から小グループでの「問題解決型学習」を取ることを特徴とし、一学年に 400-500 人の学生が所属しているとのこと。病理部門には今回の学会長である **Heike Grabsch** 教授を含む約 40 人の病理医が従事し、18 人の組織技術員、4 人の免疫染色技術員、13 人の分子生物学技術員、および 1 人の解剖技術員が所属し、年間約 19,000 件の組織検体と 30 件程度の病理解剖を扱っているとのこと。病理レジデントは大部屋で和気あいあいと仕事をしており、一方でスタッフ病理医は一部屋を 1 人ないし 2 人で使用し、診断業務や研究に集中している様子でした。病理部門の 1 日はレジデントの下書きと朝のサインアウトから始まり、レジデントと技師による切り出しや学生も含めたカンファレンスなど、日本の病理部でも採用されているスタイルと思われました。施設自体は改修直後ということもあり、光りを取り込んだ開放感のある明るい設計で、作業効率が最大化されるような働きやすい環境が整えられていました。一方で、未だに依頼書は手書きで、スキャンして電子カルテ上に取り込まれますが、臨床医の文字が読みにくいことがあるなど、共通の悩みを垣間見る一幕もありました。免疫組織化学と分子生物学的検索は病理部門内で日常的に稼働しており、病理学的診断に求められる種々の検索方法には不足なく対応している様子でした。さらに研究所（病理部門付属研究室を含む）とも渡り廊下を経て行き来がしやすく設計されており、種々の教育的、先進的取り組みが行われていました。



Maastricht Exhibition and Congress Centre にて。後ろに見える建物群が Maastricht University Medical Centre で、病理部門の見学後のひとコマ。写真左より里見会員、レジデントの Dr Bart Latten、内木会員。

本学会を通じて、英国病理学会会員の病理医との交流も多数ありました。学会長である Heike Grabsch 教授や英国 Leeds 大学の Philip Quirke 教授は消化器がんを専門とされており、日本の病理医や外科医とも共同研究のご経験があることや、その他の教授陣も含め、公私共に来日の機会を楽しみにされていることを伺い知ることができました。私どもが受けたあたたかいおもてなしも、日本における病理学および病理学者への敬意に基づくものであると実感しました。若手病理医である Dr. Young や Dr. Macklin からは、研究や専門医取得に加え、フェローシップ獲得に向けての準備など、日本との類似点、相違点など知ることができ、また彼らの熱心さと勤勉さにはたいへん感銘を受けました。今回の学術奨励賞の受賞と英国病理学会への派遣を通じて、貴重な出会いと発表の経験をお与えいただいたことを今後の病理診断や病理学研究の糧として、より一層の努力を積んでいきたいと思いを新たにしました。

派遣に際しては、深山理事長、石川国際交流委員長、並びに関連委員会の諸先生方のご高配に、改めて感謝申し上げます。今後もこのような交流を通じて、両国の病理学会が緊密に活動し、ますます発展するよう力を尽くす所存です。改めまして英国病理学会ならびに日本病理学会の関係者の皆様、および日本病理学会の会員の先生方に心より御礼申し上げます。